

第5回 日本臨床薬理学会 関東・甲信越地方会を終えて

昭和大学医学部薬理学講座(臨床薬理学部門)

内田 直樹

会期：2021年6月20日(日) 10:00~17:00

会場：昭和大学上條記念館 (Web開催)

会長：内田 直樹 (昭和大学医学部薬理学講座 (臨床薬理学部門))

テーマ：チームでつくるあたらしい時代の臨床薬理

1. 開催準備

第5回 日本臨床薬理学会 関東・甲信越地方会を2021年6月20日(日)に昭和大学上條記念館で開催した(ポスター: Figure 1).

昨年6月27日に開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大への対応から1年間開催を延期することとなった。その後も終息しないコロナ感染状況を鑑み、現地(対面)とWebとのハイブリッド形式による開催の準備を進めてきた。しかしながら、東京に発出されていた緊急事態宣言が急に延長されたことから、現地開催(対面)部分を中止し完全Web開催に切り替えて改めて準備を行い、6月20日の開催日を迎えた。

参加登録は第5回 関東・甲信越地方会のHPから行うこととし、当日の地方会開催用のHPは別途準備した(第5回地方会HPからのリンクにてログイン)。参加者には申し込みの際に登録していただいたメールアドレスにて、地方会開催用HPへのログインに必要なパスワードを連絡した。地方会開催当日は、座長・演者のほとんどが会場(上條記念館)へご参集していただいたおかげで、プログラム開始直前に対面でのリハーサルを行うことができたことが、スムーズな開催を可能にしたものと考え、ご登壇の先生方のご協力に感謝したい。

2. 開催概要

昨今の医療の現場においては異なる医療職がそれぞれの専門的な知識と技能を活かした協力体制のもとで実践される“チーム医療”が重要となってきた。臨床薬理の使命の一つである「合理的な薬物療法の追求」においても複数職種を超えたチーム医療による「新たなEvidenceの創出」が重要になりつつあることから、今回の第5回日本

第5回 日本臨床薬理学会
関東甲信越地方会
[会場] WEB開催
[会長] 内田直樹
昭和大学医学部薬理学講座 臨床薬理学部門 教授
[会期] 2021年6月20日(日)10:00~17:00

シンポジウム① 地域と連携した 研究の取り組み
シンポジウム② 本当に小児が必要な医薬品の剤形とは？
小児医薬品開発における問題

教育講演① 簡易懸濁法の誕生から現状まで
~“単に錠剤が壊れれば良い”ではない簡易懸濁法~
教育講演② がん免疫療法の臨床薬理学的アプローチ
一般演題(ポスター発表)募集!
[演題募集期間] 2021年2月22日~5月21日
臨床薬理専門医、認定薬剤師、認定CRC申請・更新の単位が取得できます。
演題登録はホームページからお願いします。

[ホームページ] <https://jscptkanto5th.wisite.com/jscptkanto5th>
[参加費] 会員・非会員ともに 2,000円
[問合せ先 事務局]
昭和大学医学部薬理学講座 臨床薬理学部門
jscptkanto5@med.showa-u.ac.jp

チームでつくる
あたらしい
時代の臨床薬理

Figure 1 ポスター

臨床薬理学会 関東・甲信越地方会は開催のテーマを「チームでつくるあたらしい時代の臨床薬理」とした(大会長開会挨拶: Photo. 1).

プログラム構成は、講演として2つの教育講演と2つの

著者連絡先：内田直樹 昭和大学医学部薬理学講座(臨床薬理学部門) 〒157-8577 東京都世田谷区北烏山6-11-11

TEL: 03-3300-5254 E-mail: nuchida@med.showa-u.ac.jp

投稿受付 2021年7月5日, 掲載決定 2021年7月24日

ISSN 0388-1601 Copyright: ©2021 the Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics (JSCPT)



Photo. 1 大会長開会挨拶



Photo. 2 シンポジウム1 会場の様子

シンポジウムを実施した (Table 1)。またポスター発表による一般演題を募集したところ、11 演題の発表の申し込みがあった。

事前登録による参加者は 191 名であり、完全 Web 開催であったにもかかわらず、リモート参加者からも Zoom ウェビナーの Q&A 機能により多くの質問が寄せられ、シンポジウムの総合討論においては活発な議論が行われ、盛会な開催となった。

3. シンポジウム

シンポジウム 1「地域と連携した研究の取り組み」では薬局を中心として実施された種々の臨床研究が紹介された。昨今、診療録データ (レセプトデータ) を用いた臨床研究の実施が盛んになってきている。治験や実施計画書の記述に従って行われる「いわゆる臨床試験」と異なり、診療録データなどに基づく研究は「リアルワールドデータ (RWD) を収集・活用した研究」と言われている。これまで日本臨床薬理学会の発表において「薬局」が参画して行われた研究発表は少なかったが、今回のシンポジウムの発表や総合討論で交わされた議論を拝聴し、薬局の持つ臨床研究実施やエビデンス発信のポテンシャルの高さを知った。薬局は医師の処方行為の終着点であると同時に、患者

Table 1 プログラム

シンポジウム 1 【地域と連携した研究の取り組み】

座長：品川区薬剤師会 加藤 肇
座長：昭和大学横浜市北部病院 渡邊 徹

- 演題 1：品川区薬剤師会における地域連携について
阿部 眞一郎 (品川区薬剤師会)
演題 2：品川がん研究会の活動について
白井 健之 (品川区薬剤師会)
演題 3：有害事象報告の活性化で地域患者と社会を守る
—行動経済学「Nudge」を活用した薬業連携の成果—
鈴木 優司 (東海大学医学部付属病院)

シンポジウム 2 【本当に小児が必要な医薬品の剤形とは？】

～小児医薬品開発における問題～

座長：昭和大学 原田 努

- 演題 1：病院で挑戦した小児用剤形開発
石川 洋一 (明治薬科大学薬学教育研究センター)
演題 2：地域薬局の抱える問題と小児用製剤開発に望むこと
川名 三知代 (ココカラファイン薬局 砧店)
演題 3：製薬企業における小児製剤開発
高江 誓詞 (アステラス製薬株式会社)

教育講演 1 【簡易懸濁法の誕生から現状まで】

～“単に錠剤が壊れれば良い”ではない簡易懸濁法～

座長：内田 直樹 (昭和大学)
演者：倉田 なおみ (昭和大学)

教育講演 2 【併用療法により予後向上を目指す】

がん免疫療法に関連する腸内細菌の重要性

座長：藤田 朋恵 (獨協医科大学)
演者：吉村 清 (昭和大学臨床薬理研究所)

に一番近い接点を持つ医療機関でもある。そこに集約される情報は「レセプトデータ」に引けを取らない「医療リアルワールド」の一角であることは事実であり、その場で行われる臨床研究の実臨床へのインパクトは計り知れない。本シンポジウムで紹介された副作用報告収集が添付文書改訂までに及ぶ「薬局を中心とした情報収集能力のインパクト」には未知数の可能性を秘めていると感じた。

今後の薬局を中心とした臨床研究の発展への期待は、後述するアンケート内の自由記載の意見において「開催地の薬剤師会とのかかわりは面白かったので、シリーズ化するといいですね」との意見からもうかがうことができる。地方会での発表にとどまらず、日本臨床薬理学会学術総会への積極的な参画・発表に期待したい (シンポジウム 1: photo. 2)。

シンポジウム 2「本当に小児が必要な医薬品の剤形とは？」では、小児の医薬品開発の現状説明を皮切りに、小児用医薬品開発においては「剤形変更」を活用した小児用製剤の開発が有効であることを示唆する発表がなされた (石川先生)。続いて患者に最も近い医療機関である「薬局」の立場から小児用医薬品開発に貢献できることの提言が実例紹介とともになされた (川名先生)。最後の演者 (高江先生) からは、製薬会社の立場から小児用医薬品の開発にお



Photo. 3 シンポジウム2 総合討論画面



Photo. 4 教育講演1 演者

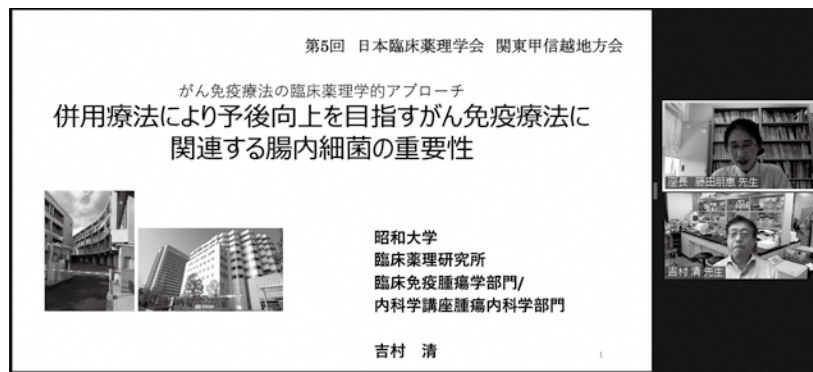


Photo. 5 教育講演2 Web画面

ける障壁について解説と製剤設計が解決のキーになりえるという解説が行われた。

総合討論の冒頭、座長から「小児の医薬品開発の問題点について“本音トーク”で話しましょう」との提案により、多数のウェビナー参加者からもQ&A機能を通じて質問が多く寄せられ活発な議論が展開された。

本シンポジウムに対するアンケート内の自由記載の意見において「薬局、病院、大学の薬剤師さんとの連携による研究、薬学部、医学部の先生のそれぞれの独創的な研究、小児の剤形開発の一端を学ぶことができました。ありがとうございました。昭和大学の先生方によるチームワークが素晴らしいと思いました」や「小児製剤については引き続き取り上げていただきたいです」との意見をいただいた。関東・甲信越地方会で行われた「小児医薬品の開発」に関する熱い議論が、来年同じく関東（横浜）で開催される日本臨床薬理学会の学術総会（大会長：聖マリアンナ医科大学 松本直樹先生）にて引き続き議論される機会があることを期待したい（シンポジウム2：Photo. 3）。

4. 教育講演

教育講演1は「簡易懸濁法の誕生から現状まで～“単に

錠剤が壊れれば良い”ではない簡易懸濁法～」を、昭和大学薬学部 社会健康薬学講座 地域医療薬学部 客員教授の倉田なおみ先生にご講演いただいた。倉田先生が確立された簡易懸濁法の開発のきっかけとなったエピソードのご紹介から始まり、確立するまでに行われた膨大な数の基礎的検討が紹介された。そして臨床試験の実施により、簡易懸濁法による薬物投与が適切に薬物の吸収（血中濃度）を得られることを示していただくとともに、多くの施設で行われている「粉碎法」の欠点についてもデータを提示して詳細に解説をしていただいた（教育講演1：Photo. 4）。

教育講演2は「併用療法により予後向上を目指す がん免疫療法に関連する腸内細菌の重要性」を昭和大学 臨床薬理研究所 臨床免疫腫瘍学部門 教授の吉村清先生にご講演いただいた。現在のがん治療において、手術、放射線、抗がん剤に続く第4の治療方法として確立された「がん免疫療法」についてのわかりやすい解説をはじめ、吉村先生が現在精力的に取り組んでおられる腸内細菌叢の多様性が、がん治療の改善に大いに寄与することを示唆するさまざまな事例や研究内容をご紹介いただいた。吉村先生の行う腸内細菌叢の研究が、がん治療に画期的な改善をもたらす成果につながることを期待したい（教育講演2：Photo. 5）。

Table 2 一般演題

一般演題 1 慢性心不全患者の緩和ケアにおけるモルヒネ使用実態の検討 鈴木敦 1、後藤雅之 1、志賀剛 2、萩原誠久 1 1.東京女子医科大学循環器内科、2.東京慈恵会医科大学臨床薬理学講座
一般演題 2 経口抗悪性腫瘍薬の吸収に及ぼす食事の影響の予測モデル構築 一構造活性相関により計算された絶食時人工腸液溶解度を指標とした検討 板垣文雄、中山文華、杉山里奈、前島多絵、渡邊真知子 帝京大学薬学部臨床薬理学
一般演題 3 トラスツマブに伴う心筋障害に対しジゴキシンを導入し手術が行えた乳癌の 1 例 志賀剛 東京慈恵会医科大学臨床薬理学
一般演題 4 定量的構造活性/物性相関 (QSAR/QSPR) に基づく薬物の乳汁移行予測モデルの構築 (第 2 報) 吉田晋、前島多絵、渡邊真知子、板垣文雄 帝京大学薬学部臨床薬理学
一般演題 5 腫瘍循環器外来開設から 3 年間で見てきた新たな役割と課題 木田圭亮、小林司、大滝正訓、太田有紀、武半優子、飯利太朗、松本直樹 聖マリアンナ医科大学薬理学
一般演題 6 尿 Na/K 比計測器「ナトカリ計」を用いた食塩摂取量評価に関する研究 荒川基記 1、渡邊貴介 1、鈴木皓也 1、野村玲央 1、関塚宏光 2、岩堀敏之 3、小野真一 4、日高慎二 1 1.日本大学薬学部医薬品評価科学研究室、2.富士通株式会社健康推進本部富士通クリニック、3.滋賀医科大学公衆衛生学部門、4.日本大学薬学部臨床医学研究室
一般演題 7 わが国における緊急避妊薬の適正使用と乱用防止へ向けた医・薬・教育領域の継続的協働の重要性 大塚邦子 1,2,3、鈴木啓太郎 1、越智定幸 1、谷口実 4、安原一 5、内田直樹 2 1.横浜薬大、2.昭和大医、3.神奈川県女性薬剤師会、4.土浦一高、5.昭和大医学医療振興財団
一般演題 8 健康成人および高齢患者におけるサイズの異なる錠剤に対する健康成人での服用性および高齢患者での取扱性の評価 柏倉康治 1、田中紫茉莉 1、倉嶋誉 1、伊藤讓 2、並木徳之 1,3、内田信也 1 1.静岡県立大学薬学部実践薬学分野、2.レモン薬局、3.帝京平成大学薬学部物理薬理学ユニット
一般演題 9 昭和大学病院臨床研究支援センターにおける薬学部病院実習への対応 竹ノ下祥子 1,2、内倉健 2,3、佐々木哲哉 1、小林真一 1,2 1.昭和大学臨床薬理研究所、2.昭和大学病院臨床研究支援センター、3.昭和大学薬学部病院薬理学
一般演題 10 医療機関における Quality Management System の構築と今後の展望 ～昭和大学病院におけるプロセスに基づく臨床試験の手順の見直し～ 佐々木哲哉、松下知司、日比野文代、竹ノ下祥子、根岸晴美、春田祐美子、内倉健、小林真一 昭和大学病院臨床研究支援センター
一般演題 11 研究促進を目指した研究計画書 テンプレート案の作成について 内倉健 1,2,3、百賢二 1、竹ノ下祥子 2,5、水上拓也 3,4,5、龍家圭 3,5、肥田典子 3,4,5、三邊武彦 2,3,4,5、井上永介 3、内田直樹 4,5、小林真一 2,3,5 1.昭和大学薬学部病院薬理学講座、2.昭和大学病院臨床研究支援センター、3.昭和大学統括研究推進センター、4.昭和大学医学部薬理学講座臨床薬理部門、5.昭和大学臨床薬理研究所

5. 一般演題 (ポスター発表)

11 演題が一般演題として e ポスター形式で発表された (Table 2)。発表は事前に発表者から事務局に送付されたポスター (PDF) を地方会会場 HP のポスターページに設定したリンクにより掲載した。閲覧者からの質問は、ポスターページの演題リストに併記した発表者のメールアドレスを介して行うこととした。

後日行ったアンケート調査によると、今回の発表形式について 78.1% が「とても良かった」「よかった」と回答しているが、その一方で「質疑のしにくさ」についてのコメント (自由記載) もあり、今後の Web 開催の課題としてさらなる検討が必要である。

6. アンケート結果

地方会の参加証 (領収書) を参加申込時に登録されたメールにて一斉送信する際、本地方会に関するアンケートを実施した。アンケートへの回答は事前に作成した Google フォームへの回答を依頼する形で行い、Google フォームへのログイン URL をメール本文に記載して行った。

有効回答数の 116 名/185 名 (回答率 62.7% : 7 月 2 日時点) 内の会員の属性としては学会員 49.1%、非会員 50.9% であり、参加者の職種については医師 19.0%、薬剤師 49.1%、CRC 22.4% が主なものであった。特徴的なのは、参加者の勤務先の質問において、「大学 (病院、講座)」所属の参加者が大多数 (54.3%) を占める中「一般病院・診療所・クリニック・薬局」からの参加者が 18.1% であったことである。これは本会のシンポジウムや教育講演に「薬剤師」「薬局」をターゲットにした内容であったことが参加者の属性に表れたものと考えられる。

今回の地方会は完全 Web 形式での開催となった。Web 開催については、「気軽に参加できた 82.8%」「移動がないのが楽だった 72.4%」「学会参加のための時間調整がしやすかった 57.8%」「遠隔地より参加できた 36.0%」などが主なポジティブな回答であった。一方で、「会場の雰囲気はわからなかった 27.9%」「現地にいけなかった 21.1%」などのネガティブな回答も得られたが「よくなかった点」についての質問に 29.7% の「特にない」の回答を得たことは、主催者側としてはとてもうれしく思った。

「今後の地方会開催形式について」は、「現地 (対面) 開催を主とするべき」は 6.9% と少なく、「現地 (対面) と Web (リモート) の両方 (ハイブリッド)」が 70.7% と圧倒的多数を占めており、After コロナの地方会の在り方において参考とすべき回答であった。

「地方会で取り上げてもらいたいテーマ」について、自由記載にて回答を求めたところさまざまな回答をいただいた。回答内容が多岐にわたるため、本稿では個別の回答の記述は割愛するが、関東・甲信越支部世話人会にて詳細報告を行う。



Photo. 6 運営スタッフ

本稿では学会本体や他の地方会支部とも共有できる回答を2つ紹介したい。

- 「若手やそれぞれの地方の大学の学生のセッション枠を作る」(学術総会ではハードルが高くて発表できない方々に発表の場を与え、後世を育てる教育の場にもなるためよいと感じました。この中で育った若者たちが、学術総会で発表という流れができるのも面白いと思いました。)
- 本会(学術総会)でテーマとした方がいいのでは?と思われるテーマを一度地方会で扱って議論がなされたらさらにバージョンアップして本会へ、という流れは良いと思う。(今回の小児の医薬品開発もそうなって欲しい。)

いただいた貴重なご意見については、今後の地方会、ならびに学会の発展に活かしていきたいと思う。

7. 今後の地方会開催に向けて

支部会の使命は、学会の設立趣旨に則り、各支部の地域における会員に対する教育・研修を行うことにあるが、加えて新たな会員獲得のために学会の活動を広く周知することもある。今回のプログラム構成においては、適切な薬物療法実施のステークホルダーとしての関与や責任が、今後増していくことが予想されるとともに、臨床研究においても重要な調剤情報としてのリアルワールドデータを豊富に所有する薬局にフォーカスを与えたものとなっていた。本地方会への参加を機に、学会入会や学術総会への参加・発表につながることを期待している。

大会長の裁量により自由なプログラム構成などが可能であるのが地方会の利点であると考え、Webによるリモー

ト参加を併用する学会形式が主流となりつつある今、学会参加には地理的制約なく参加可能となった。今回の開催では学会員の参加者中、16.8%が他の支部会からの参加であった。参加者にとって魅力のあるテーマは、所属地方会支部への参加にとどまらず、支部外の地方会への参加行動につながり、学会全体の活動の発展に寄与することが期待できる。関東・甲信越支部として、今後も他の支部からの参加者を多く迎えることができるような魅力的なプログラムを企画し、地方会の運営を通じて学会本体の発展に尽力していくことが重要であると考えている。

第5回関東・甲信越地方会の開催中に、関東・甲信越支部世話人会が行われた。第6回の大会長である獨協医科大学薬理学講座の藤田朋恵先生から次回開催の準備概要についての説明がなされ、閉会式においても第6回開催への参加の呼びかけが行われた。来年の第6回開催においては、新型コロナウイルスの感染状況が収束に進み、対面開催とのハイブリッド開催が行われることを望む。

8. 謝辞

今回の開催は、1年間の延長に加え、直前の開催方法の変更があったにもかかわらず、多くの方々にご参加いただいたことに感謝いたします。また、開催事務局業務ならびに当日の開催運営を担当していただいた昭和大学医学部薬理学講座(臨床薬理学部門)、昭和大学臨床研究支援センターの皆様(スタッフ:Photo. 6)ならびに開催の趣旨にご賛同いただき協賛をいただいた多くの方々のご支援により盛会にて終了できましたことに厚く御礼申し上げます。